

養生学研究

第6巻 1号(通算8号)
2009年12月20日発行

【原著論文】

武者小路 澄子 (筑波大学 図書館情報メディア研究科)

対気におけるコミュニケーションの可能性と潜在性

～気功練習の現場への質的調査を通して～

1

【学会通信】

ようせいフォーラム 2009(プログラム)

34

【原著論文】

対氣におけるコミュニケーションの可能性と潜在性

－ 氣功練習の現場への質的調査を通して －

武者小路 澄子*

Potentialities and Fertilities of Communication in ‘Taiki’: A Qualitative Research on the Field of Quigong Practice

Sumiko MUSHAKOJI, Ph.D.

Abstract

“*Taiki*” is one of the exercises variously practiced in the quigong practice (i.e., an internal Chinese meditative practice). Basically it is performed by two persons, who stand opposite to each other, and “circulate their *qui*”. At the end of each set of “*Taiki*”, it is formulated in such a way that one of the two persons gets “blown away” by the other’s *qui*. There seems that in “*Taiki*”, various and fertile types of communication are taken place between two persons, and between the internal experience of a person and the outer environment.

In order to find out the variety and fertility of the “*Taiki*” as communication, this study makes a qualitative research on what kind of communication is taken place in some fields of the “*Taiki*”, and how it is perceived by a variety of quigong practitioners. Through the video and audio recording of the scenes of “*Taiki*” and interviewing (i.e. unstructured interviews) to three learners and three experienced practitioners, the data was collected, and analysed by minute open-coding, systematic coding and forming categories. The result was examined with some theoretical communication models, and main two types of communication were found out in the “*Taiki*” practices: (1) An acting towards the partner, and (2) a cooperative (or harmonious) work between the two, which can be seen generated by the two’s intended arrangement, the body awareness on the spot, and the holding consciousness and images in common between the two. The actual recordings of the “*Taiki*” fields and talks of the *Taiki* practitioners indicate a variety and full richness of the communication in “*Taiki*”. Although this study focuses on the limited scope and fields of “*Taiki*”, it suggests that the potentiality and latency of “*Taiki*” as human communication, which cannot be explained by the previous theoretical communication models but can give us an understanding of our rich communication among oneself, the others and the environments.

*筑波大学図書館情報メディア研究科 (Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba)

〒305-8550 茨城県つくば市春日 1－2 筑波大学春日キャンパス

I. “コミュニケーション、としての対氣の研究

氣功には様々な行法や目標があり、また「氣功とは何であるか」の答も一様ではない。本研究では、氣功の修練の一つ、「対氣」に着目して、これを“コミュニケーション”と捉えた場合、そこでどのようなコミュニケーションが成立しているのか、またそれがわたしたちにどのような意味や広がりをもつのかについて研究していきたい。

“氣功をコミュニケーションとして捉える”とは、実際にどのようなことだろうか。また、それによって何が見えてくるのだろうか。“コミュニケーション”という用語自体、研究領域や立場によって多様な定義があり、扱われる範囲も一様ではない。一方、氣功においては、自らの氣の循環、自己と他者（あるいは他の命）との氣の交流、自己と環境（周囲の空間や天と地、さらには宇宙全体）との氣の交流等、様々な体験が報告されている（遠藤、1992）（津村、1993）。本研究ではこれらを広く捉えることとし、コミュニケーションの語義 *commonis* [ラテン語: 英語の *common*; 共有なもの] を踏まえて、「相手（対象）と何らかのものを共有していく過程」全てをコミュニケーションとして捉えることにした。そして、こうした捉え方により、氣功における自他の関わり方や自己と世界との関わり方、その関わりの本質、さらには自己や他者のあり方における広がりや可能性の一部をより明らかにすることを目指したい。

対氣は、氣功の修練のうちでも二人の人間が“氣の交流”を行う修練の一つである。従って、コミュニケーションとしてこの“氣の交流”を捉えるなら、ここでのコミュニケーションはパーソナル・コミュニケーションが中心となるが¹⁾、本研究では、二人の個人間の相互関係の中で捉えられる範囲でのコミュニケーションに視野を狭めず、対氣の現場で当事者たちが観察・報告していることをできる限り収集していくことから始めたい。即ち、「個人（自己／他者）」といった枠組みで

捉えられないものもできるだけ逃さず、「相互関係」を前提とした共有の過程だけに予め絞らずに、前述した当事者たちによる広い範囲の“氣の交流”の体験を可能な限り拾っていくことにしたい。このために、対氣を行う当事者にとって“生じている現実”²⁾をなるべく現場に近いところで詳細に観察することを行い、そこから新たに対氣を通して可能となるコミュニケーションの姿や対氣から展開できるコミュニケーションの可能性や潜在性を洞察していくことにしたい。

このような考えから、まず、対氣を行う当事者が“どのような現実を構成しているか”を現場に近いところから詳細に描き、“当事者にとっての現実”（バーガーとルックマン、1977）を発見していく質的調査・分析を採択することにした。具体的には、対氣の練習の現場で、現場にいる氣功歴の異なる当事者達が行う対氣を実際に映像に録画・録音し、対氣後に両者が語った内容の録音や現場の参与観察によって得られた観察メモと相互に関係付けながら、これらのデータの詳細なコード化を行う。そして、「《どのようなコミュニケーションが生じていると観察できるか》、また《当事者達はどのようなコミュニケーションが生じていると語っているか》を付き合わせつつ、現場でどういったコミュニケーションが行なわれており、それが当事者達にはどのような現実として意識されているかを分析したい。この分析を踏まえ、対氣をコミュニケーションとして捉えるなら、それがどのような性質のものであり、そこにどのような可能性と潜在性を見出すことができるのかを考察していきたい。

II. 予備的考察：“コミュニケーション、としての対氣の可能性

II. 1. 氣功における「対氣」

対氣は、一般に、対となる二人の人間が“氣の交流”を行った上で、「飛ばす」側に位置する人が相手を“氣で押す”、“氣で飛ばす”ことをする

氣功の修練の一つと捉えられる。例えば、西野流の対氣は、西野流呼吸法の創始者西野皓三によって「手の甲と手の甲を合わせる格好で『氣』を交流させる」「エネルギーのコミュニケーション」と説明されている（西野、1993）。この練習は、原則的に対人で行い、「お互いに正面で向かい合って立ち、片方の足を半歩前に出し同じ側の手を手刀で出し合って、手首のところに合わせ」、「相手の中心線を目当てに押し合う」ことをする。最初は腕力で押しってしまうが、上級者になると「氣」を丹田から出して相手に働きかけることができるようになるという（遠藤、2002）。

本研究で、氣功の中でも対氣に着目したのは、二人の人間により非常に豊かな身体コミュニケーションがなされていると想定できること、及び以下のⅢ. 1節で述べるように、データを収集する氣功の練習会でほぼ毎回練習が行われるため、必要に応じてのデータ収集が可能であることが主要な理由である。氣功の流派や教室によって多様性があると想定できるが、本研究で捉える「対氣」は、原則として、向き合った二者が手の甲を合わせて幾度かそれをまわすように押し合うこと（当事者たちによる「氣を回す」行為）を行った後、「飛ばす」役割の側に位置する者が相手を「飛ばす」こと（当事者たちによる「氣で飛ばす」行為）までを対氣の単位、一回と数えることにする。調査対象とした練習会では通常、互いが組み、まず右足を出し左足を下げた身構えで対氣を行い、一回を終えると今度は互いに左足を出し右足を下げた一回の対氣を行う。この二回が一セットと数えられている。組になった同士は、一セットから数セットの対氣を行い、組を交替する。本研究の調査・分析では、こうした対氣の現場を、組み合わせ、各セット、一回毎の単位で対氣として扱った。

Ⅱ. 2. 本研究における「コミュニケーション」の範囲と捉え方

Ⅱ. 2. (1) 本研究における「コミュニ

ケーション」の範囲

第I章で述べたように、本研究では「相手（対象）と何らかのことを共有していく過程」全てを「コミュニケーション」として捉えていく。その上で、対氣においてどのようなコミュニケーションが生じているか、どのようなコミュニケーションを当事者達は捉えているかを研究していくわけであるが、実際に観察する範囲は、Ⅲ. 1節で述べる現場において収集する以下のデータの範囲である。

○映像から観察されること

- * 言語・非言語要素（発話、パラ言語、空間行動、対人距離、からだの向き・力の入れ方、呼吸の仕方、からだと足幅・脚の動き等の関係、身振り・しぐさ・動作、表情〔特に笑いと目線〕、等）

○当事者が言語化できること

- * 対氣中の当事者の発言（録音）
- * 対氣後の当事者へのインタビュー（録音）

○現場で参与観察したことの観察メモ

本研究は一般に言う対氣をコミュニケーションとして研究することを意図しているが、一般に対氣とは、これを行う練習場やその運営方針、主要な指導者・指導方針によって、また、組み合わせ（対氣を行う二人の経験、性別、パーソナリティ等とその組み合わせ）によって非常に豊かな多様性があると推測される。今回の調査では、調査対象の性質上、氣功の初心者と氣功指導経験者との対氣が主要な分析対象の一つとなっている。このため、結果において、単に対氣を行う際のコミュニケーションだけでなく、初心者（以下では、「学習者」と呼ぶことにする）が「対氣はどのように行えばよいか」「どうすれば対氣ができるか」を学びとっていく過程、指導者が学習者の動きや意識を読み取って対氣を行う上での技法、からだや

意識のあり方、身体感覚などを指導していく過程、におけるコミュニケーションに大きく焦点が当たることになってしまった。

意識の持ち方や立ち居振舞いが全く分からない学習者が、指導者から「そうそう、それで対気となっているよ」という確認を得ていく過程や確認を得たことを基礎に相手を替えながら経験を積み重ねていく過程は、対気という行為に初めて参入する過程 —— 対気の基礎的手順を知覚し、同時にこれを身体知³⁾化するという過程 —— として注意を払っていくことにし、第IV章の結果においては、「学習者と指導者とのコミュニケーション」に特徴的なことは、可能な限り熟練者同士のものとは区別して、そこで生じていることを描写した。また、他にも、今回の現場で特徴的な要素や、当事者や当事者同士の組み合わせによって特徴化される要素については、可能であり妥当である範囲で、明記することにした。

II. 2. (2) コミュニケーションを捉える多様な枠組みの援用

コミュニケーションをどのように捉えるかに関しては、多様な学問領域において様々な立場やアプローチがある。ここでは、コミュニケーションとしての対気の例を現場に近いところで捉えてその可能性を明らかにしたいので、特定の学問的立場からの視点に限定せず、対気を捉えるのに有効な視点が複数あった場合には、有効だと判断した視点は取り上げていくことにする。中でも、野村一夫が整理している異なる二つのコミュニケーション・モデルは、第IV章で対気を分析していく際、対気の当事者たちがどちらのモデルの視点で捉えることもあり、一方ここで観察できるものがこれら二つのモデルでは把握しきれないコミュニケーションの可能性を示唆しているとも考えられたため、コミュニケーションとしての対気の本質を探るのに有用であると考えた。そのため、この節で簡単にふれた上で分析中で援用していきたい。

野村は、人間のコミュニケーションの本質について解説する中で、コミュニケーションを「情報のキャッチボール」と捉える「常識モデル」と「記号を媒介にした相互作用」と捉える「社会学モデル」があることを述べ、両者の違いを整理している(野村、1992)。本研究では、これらのモデルの背後の考え方をより明確にするために、「常識モデル」を「情報伝達モデル」、「社会学モデル」を「相互作用モデル」と呼ぶことにしたい。この点を修正して、野村の描いたモデルを第1表に示す。

第1表 修正した「二通りのコミュニケーション・モデル」

	情報伝達モデル	相互作用モデル
基本構造	情報のキャッチボール	記号を媒介とした相互作用
意味の決定	送り手の意図	受け手の反応

まず、最初の「情報伝達モデル」であるが、これは「情報のキャッチボール」が基本構造となっているコミュニケーション・モデルである。そして、情報がキャッチボールのようにやりとりされるのであるから、そこで伝達されること(即ち、「意味」)は、送り手によって「意図」されたことであることになる。野村はこのモデルを、日常的にわたしたちがコミュニケーションに対して持つ見方・見解に近いと述べている。わたし達はコミュニケーションの相手に情報(即ち、特定の事実、自分の考えや思い、等)を伝えようとしてコミュニケーションを行うのであり、反対に、相手の言うことや行うことの中にどんな情報があるのかを抽出しようとする。「あなたは、わたしの言ったことを、きちんと受けとめていない」「君がそういうつもりなら、はっきりそう表現したら

良いだろう」といった相手への批判は、その場のコミュニケーションの問題に対して、情報伝達モデルの枠組みから捉えてより円滑にすればよい、という当事者の前提を露わにする発言である。

一方、野村は、G. H. ミードのコミュニケーション理論（ミード、1973a）に言及した上で、社会学においては「情報伝達モデル」とは異なるコミュニケーション概念が存在すると主張する。それは、コミュニケーションの現場にいる当事者達のやりとり（相互作用）に着目し、それが記号⁴⁾を媒介とすることにより現実のものとなっていることから、コミュニケーションの実体を「記号を媒介とした相互作用がなされて（行為されて）いるかどうか」にあるとみなす考え方である。また、社会における思考、言語、意味、コミュニケーションを原初的な「身振り」から段階を追って考察したミードが「一定の社会的動作におけるある生物体の身振りは他の生物体に反応をひきおこし、それ〔この反応〕が直接的に第一の生物体の行動およびその結果とむすびついている」（ミード、1973b）と述べていることを受け、社会学においてはコミュニケーションの「受け手の反応が送り手の行為の意味を決める」とみなす考え方が採られていると述べている。これは、「自分の意図したことが伝わったかどうか」でコミュニケーションの成立の是非を計る（情報伝達モデル）のではなく、自分が述べたことや行ったこと（即ち、記号）に対する相手の反応を確かめてやりとり（相互作用）を続行させていこうとするコミュニケーション観をもつということになる。

野村は、ミードの理論からこのモデルを昇華させているが、コミュニケーションを当事者の意図した意味の伝送の有無によって見極めるのではなく、これを一端不可知であるとみなし、そうではなく、当事者の行為自体、実践自体の中にコミュニケーションの成立の是非を見ていこうとする立場は、同じく社会学者に多大な影響を及ぼしたL. ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム（ヴィトゲン

シュタイン、1976）の考え方にも通ずるものであると言えよう。

この二つのモデルのどちらを採るかによって、コミュニケーションをどう捉えるか、何を根拠に「コミュニケーションが達成された」とみなすか等、コミュニケーションを捉える上での着眼点や条件が異なってしまう。対気をコミュニケーションとして捉えていこうとする場合、情報伝達モデルの枠組みを採れば、相手に何らかのものやこと（当事者にとっての「気」？）が伝わったかどうか、がコミュニケーションの達成の条件となるであろうし、相互作用モデルに則り、当事者二人が何らかの記号（言語、非言語）を媒介にした相互作用をしているかどうか、どのような記号でどういった相互作用が生ずるのか、そこに何らかの規則や秩序、メカニズムが存在するのか、を問うこともできるだろう。本研究では、現場で観察できる対気という現象や行動、当事者達が意識化していることを、この両モデルを含め、どのような枠組みでなら見て取って、理解していくことができるかの検討も含めながら、コミュニケーションとしての対気を扱っていきたい。

Ⅲ. 研究方法

本研究では質的調査法を採用することにした。その理由を以下に述べる。

「対気」においては、当事者の内ある程度習熟した者は、一般に微細で精妙な「気」を感じ取り、何らかの反応をしていると捉えられている。しかし、からだで反応したことを現場で直接観察することは出来るが、それが何に対してのどういった動きや反応であるのかについて当事者達が現場で言語化することは少なく、また、全てのことを意識化している／意識化できるとは想定できない。従って、まずは、現場で現実生じていることを詳細に観察し、データ化の可能なところとその限界を見極め、詳細かつ丁寧にデータを分析することが必要と考えた。また、これらを、できる限り

「対氣」の場に近いところで、丁寧に拾い出していくことが必要と考えた。このため、現場で生じていることを詳細にデータ化し、対象に対する当事者達の意味付けを丁寧に組織化することから、研究テーマについての発見を重ねていくといったフィールドワークによる質的調査（フリック、2002）（佐藤、2002a）行うことにした。

Ⅲ. 1. 調査方法

実際に対氣を行う現場で、できるだけ自然に近い、即ちこの場合普段通りに近い形で録音・録画が可能なことを考慮し、(A) 本研究の著者が所属する氣功の練習会のリーダー（氣功指導者）に協力依頼し、このリーダーが指導した経験があり協力依頼できる方々に実際に氣功練習・氣功指導として対氣を行ってもらった。(B) さらに、本研究の著者が所属する氣功の練習会（毎週1回開催）で、許可の得られる場合には、対氣の現場を録画・録音した。

(A) の対氣の現場への参加者は、第2表の通りである。このように、氣功経験や氣功指導経験、年齢・性別の異なる人々に各々組みになって対氣を行ってもらい、これら全てを録画・録音した（平成21年3月5日、7時間にわたって実施）。同時に、対氣を行っている二者や二者をとりまく周辺の様子をできるだけ注意深く観察し、気付いた事実に関して観察のメモをとった⁵⁾。また、この「対氣」の最中や直後等、できるだけ現場と近いところで当事者たちにインタビュー調査（非構造化面接法）を行い、「対氣」の内観や現場において感じたことや考えたことについて語ってもらった。さらに、熟練者のEとFに対しては、録画した映像を再生しながら、対氣のときに何を捉えているかについて追調査のインタビューを行った。そして、(1)「対氣」を録画・録音した映像および観察メモと(2)インタビューの録音、をデータとして収集することができた。

Ⅱ. 2節で述べたように、今回収集したデータ

第2表 調査対象者（「対氣」参加者）のプロフィール

参加者	年齢	性別	氣功歴、氣功指導歴
A	20代前半	女性	初心者対象の公開講座（10回:講師はF）受講。
B	20代後半	女性	大学院の授業（1年間:講師はF）受講。
C	30代前半	女性	大学院の授業（同上）および初心者対象の公開講座（同上）受講。
D	40代後半	女性	氣功歴9年。
E	40代後半	男性	氣功歴18年。 氣功指導歴あり。
F	60代前半	男性	氣功歴20年。 氣功指導歴あり。

は、上記(A)(B)の現場から得たものであるため、学習者と熟練者との対氣、および熟練者同士での対氣が中心となっている（この組み合わせは、例えば他の氣功教室でもほぼ同じであると推定できる。一方で、指導者によって対氣の行い方や指導方法は多様性があるのではないかと予測できる）。また、(A)において、第2表A~Cに関して特徴的なこととして、全員が体育系の学部や大学院に所属しており、スポーツにおける専門領域を持っていることを挙げておく必要がある。即ち、A~Cは、対氣の学習者に位置付けられはするが、日常からからだを鍛えており、特定のスポーツにおけるからだの使い方に習熟しており、身体能力も標準より優れていると述べることができよう。従って、ここで得られるデータは、そのような経歴の無い学習者のものとは異なっている可能性があることに注意を留めておく必要がある。

なお、本論文の著者は、(A)と(B)の現場に

氣功経験者（第2表のD）として参加している。その点でこの調査は、氣功の現場の外部から第三者が行った性質のものではなく、参与観察法に入れられる特徴を持っている。即ち、予め現場の当事者たちとラポール(rapport)⁶⁾が築かれており、氣功の現場のインサイダーとして当事者たちの現実に近いところから練習の一環という形の自然な形でデータ収集が可能であった。反面、データ収集・データ分析を行う際には、氣功のインサイダーとしての主観的な意味付けやインサイダーとしての共通理解とははっきりとした境界線を引き、アウトサイダーの視点（当事者の現実世界に対する第三者的視点）を慎重に保つようにした。具体的には、インタビュー調査において当事者達と距離を保つこと、分析に当たっては、データ収集した映像から客観的に事実として抽出できることと当事者たちが意味付けている「対氣の世界」とを明確に分けて分析し、後者に関しては当事者達の語ったことは当事者一人一人が意味付けていることとして、そのまま記述するように注意した。

しかしまた、S. B. メリアム(2004)が述べているように、「質的調査研究においては、調査者は、データ収集と分析における主たる道具である」。本研究が対象とする対氣のコミュニケーションは、当事者にとって「氣の交流」という、氣功の部外者からは容易に読み取ることの出来ない豊かな身体コミュニケーションであると予測できる。そして、データから客観的に読み取れることも、「氣の交流」という対氣の本質から捉えることを試みない限り、その各々の詳細や相互関連を説明付けていくことは容易ではないと推測できる。そこで、調査・分析においては、調査者がインサイダー／アウトサイダーとしての立場を意識的に使い分けつつ、対氣の現場のインサイダーとしての体験が生かせる場合には、立場を意識して生かしていくことにした。また、特に映像データを中心とするデータ解釈に当たって、当事者のうちの熟練者(第2表のE, F)にもインタビュー中にインサイダ

ーとしての経験に基づいて解釈してもらい、そこで語ってもらったことも生かしていくことにした。

Ⅲ. 2. 分析方法

録画した映像に関しては、非言語メディア（ヴァーガス、1987）や非言語を含むコミュニケーション・チャンネル（大坊、1998a）、“コミュニケーションとしての身体、（菅原と野村、1996）性に着目し、同時録音した当事者の発言と共に、対氣を行う二者の身体的な関わり・表情・身体動作・空間行動等に焦点を当てて、当事者たちや彼らの行為にコミュニケーションとしての何らかの共有過程があるかどうかに関して、気付いた点をその都度コード化し記録した。同時に、対氣中の言語的発言も記録した。対氣後のインタビュー録音に関しては、質問に対する発言者の発言内容だけでなく、発言者が当意即妙に答えるさまや、反対に、苦心して意識化しつつ答えるさま、言語化できない様子等、対話や発言者の雰囲気や可能な範囲で捉えられるように、転記を行った。その上で、これらに関しても、文脈⁷⁾から切り離さないように注意して詳細なオープン・コーディングと焦点をしばったコーディング（佐藤、2002b）によるコード化を行った。さらに、映像や観察メモから実際に事実として着目されることと、対氣の主体である当事者が意味付けていることとは区別し、現場からどういったコミュニケーションが観察されるか、また、当事者にとっての現実がどのようなものであるのかを整理しつつ、コードの体系化を行った。そして、これらの「対氣」の現場にはどのようなコミュニケーションが観察可能なのか、また、当事者達にとってそれはどのように捉えられているのか、といった観点から、コミュニケーションの種類をカテゴリー（階層化を行ったコードのうち上位のコードを研究テーマであるコミュニケーションという主題に適切な形で位置付け直したもの）として抽出した。

IV. 結果 ～対気におけるコミュニケーションの種類～

当事者達が行った対気の録画・録音データ、観察メモ、対気後のインタビューの転記をコード化し、コードを相互に関連付けながら整理・体系化した。このようにして得た階層的コード（佐藤、2002b）に基づいて、「どのようなコミュニケーションが観察されるか、および「当事者の意識においてどのようなことが捉えられているか、という観点から、カテゴリー化を行った。その結果、対気において多様なコミュニケーションがカテゴリーとして観察・抽出できた。以下で、順を追って、結果として得られたコミュニケーションの種類やその特徴から、主要なものを述べることにする。

以下では二つの節に分けて結果を説明するが、この二つやその中で更に分けて説明するコミュニケーションの種類は、一つ一つ別のものとして分類して形成したカテゴリーではない。これらは、映像データ中でまとまりのある動作・行為としてコード化できたことを理解するのに有効な視点から見て取ることの出来るコミュニケーションの形態を列挙したものである。したがって、以下で述べるコミュニケーションの種類は、相互排他的なものではなく、むしろ各々を重層的に眺めることで対気をコミュニケーションとして理解できるようにするためのものとなっている。

また、II. 2節で説明したように、コミュニケーションを捉える上での（A）情報伝達モデルの枠組み、（B）相互作用モデルの枠組みを必要に応じて参照していく。同時に、＜学習者と指導者との対気＞に特徴的な要素等に関しては、その特徴が描ける限りそれを明記して示していくことにする。

なお、転記したインタビュー・データに関して、以下の結果分析の際にその抜粋を提示するが、抜粋部分の文脈や語り手（当事者と調査者）の語り方を会話のより広い範囲で伝えられるよう、その前後の会話も含めたものを付録1に示した。

IV. 1. 二者における方向性のある働きかけ

第2表に示した参加者のうち、A～C（便宜的に「学習者」と呼ぶ）のいずれもが、D～F（便宜的に「熟練者」と呼ぶ。うちEおよびFはA～Cに対気の指導をしながら行っており、そうした場合は「指導者」とも呼ぶ）と対気を行った。また、D～FはA～Cと対気を行うのに加えて、お互い同士でも対気を行った。

これらの対気の現場において、＜一方が他方を押す＞＜押された側が相手を押り返す＞＜一方が相手を飛ばす＞といった、一方が相手に働きかける動作・両者が働きかけあう動作が映像から観察された（第1図、第2図）。



第1図 学習者Bと指導者Eとの＜押す＞＜押り返す＞の練習



第2図 指導者Fが学習者Aを＜押す＞、Aが＜飛ばされる＞

学習者と熟練者の対気では、殆どの場合、実際に掌や手の甲を合わせて、(ア) 一方が押す／他方が押し返す、(イ) 一方が押す／他方が飛ばされる、という動作が繰り返された。これは、両者がまず相手のからだを感じた後(ア)によって「氣をめぐらせ」、両者のからだを整い「氣が充実したところで、飛ばす側に位置付けられる人が相手を(イ)の「氣で押し、飛ばす」という対気の手順になったものである。この場合、片手を使うときと両手で行われるときがあった。また、学習者・熟練者の組み合わせの一部と熟練者同士の多くの場合、掌や手の甲を合わせず、相手とは距離を置いたままで、<相手を押す／相手から飛ばされる>という行為が行われていた。

一方、学習者を指導者が指導すると見られる場面では、学習者の方が押そうと試みても指導者は飛ばされたりはせず、首を振ったり立ちどまって「力ではなくて、相手を感じて」といった言葉をかけて、押し方の指導をしていることが観察された。そのような場合、言葉による指導後に、学習者が押して指導者が飛ぶ場合は、「OK」とか「そうそう！」と指導者が評価し、押し方が成功したことが確かめられていた。

こうした動作・行為をどのように解釈したらよいのだろうか。(一方が) <押す><飛ばす>という動作は、一方が他方に働きかける、という方向性(一方向)を持った動作である。また、一方が<押して>他方が<押し返す>という動作は、一方が他方に働きかけたのに続き働きかけられた相手も働き返す、という方向性(双方向)をもった動作である。そして、一方の<押す>動作は、他方にとっては<押される>という状態として両者に共有されている。こうした動作の共有を対気を行う当事者が何らかのことを伝える・伝え合う、と捉えれば、情報伝達モデルに当てはめることが出来、両者が何らかの記号を媒介に相互作用をしていると捉えれば、相互作用モデルに当てはまるコミュニケーションをしていると言えるであろう。

それは、どちらのモデルを採っても、一方向性、双方向性という動きの方向を伴ったコミュニケーションである。

しかも、学習者の場合、「押し方」によって指導者が<押される>ときと<押されない>とき、<飛ぶ>ときと<飛ばない>ときがあり、<押される><飛ぶ>ときには妥当な「押し方」をしているという評価を受けている。このことは、これらの<押す／押される><押す／飛ばされる>という動作が、対気という修練の基本的な行為を成立させるものであり、学習者はその学習の段階において、妥当な「押し方」「飛ばし方」を学んでいるのだと見て取ることができる。即ち、妥当な<押す／押される>が続き、最終的に<押す／飛ばされる>が達成された場合、「きちんとした対気となっている」ことが指導者に確認されている。同時に、学習者側も、指導者の評価に従い、「よい」とされた「押し方」「飛ばし方」を継続していこうとする。それは、コミュニケーションを原初的形態から理論化したミードの考え方を借りるなら、学習者が身体的領域において、特定の「身振り」について、まだはっきりとその範囲も意味も同定できないながらも、それが相手にとって「意味をなす」(ミード、1973a)かどうかを学んでいく過程であるとみなすことができる。そして、ここには学習者・指導者の両者が共有する、「対気について学ぶ」「実際に対気を行う」メカニズムがあると考えられる。

こうしたことは、学習者達の発言および行動とも呼応している。第3図で、対気後にインタビューされた学習者Aは「最初は一」(17行目、以下行数はLで示す。例 17行目=L17)「もう全く、はっきり言って全くわからない一」(L19)状態だったと述べているが、最後の段階で「あのう、氣を、しー あのう呼吸しているとき、何か、こっちに落ちてきたというか、何か一」(L22-23)と対気中の感じ方が変化してきたことを告げている。しかし「それが氣なのかどうかは分からない一」

(L29) としている。また、指導された内容を振り返って、学習者 B は指導者が「『そうそうそう』と言うけれども」(L7-8) 自分には感じられず (L8) 「理解、なかなかできない」 (L9) と告白する。そうした指導者の発言は、B にとって指導者には分かっていることであり、B 自身の「からだに多分起っていること」(L8-9)は、「自分自身が分からないー」 (L12) と、自身で位置付けられずそこに何があるのかを見極めようと模索している。

ここでは、A、B のどちらの当事者たちも、対気中の自らの身振りや感覚のうち、何が意味をなし何がなさないかを学び取っている段階にあると言えるだろう。一方で、A、B の両者とも、録画データにおいて、E、F という指導者の指示をそのまま受けて対気の練習中の動作、姿勢、表情を最初と最後では大きく変化させており、この後の感想で「スッキリした」「楽しかった」と述べている。

対気直後の A の発言

- 16 S:「それぞれ」って言われたときに、どんな感じ、でした？
17 A:はあ、最初は一
18 S:うん
19 A:もう全く、はっきり言って全くわからないー (***) 一番最後のー 一番最後は、
20 [すごい (**)]
21 S: [わたしも見てて] 何かすごい違うっていう感じー
22 A:はあ、何か、自分の中でも、あのう、氣を、しー あのう呼吸しているとき、何か、こっちに
23 落ちてきたというか、何かー
24 S:おさまったという感じは、しているんですか。
25 A:はい。
26 S:氣が？
27 A:氣がというか
28 S:おなかに？
29 A: (2.0 秒) それが氣なのかどうかは分からないー

対気直後の B の発言

- 01 S:どうでした？ 何かちょっと、いいですか、すみません。《小声で》
02 B:何か最初ー
03 S:途中から顔色がピンクになったなって、思ったんだけど。
04 B:あ、そうですか (0.5 秒) あのうー う～ん (2.5 秒) すごい失礼かもしれないんですけども、
05 S:うん
06 B:「ボディワーク」《注:F が氣功を教える授業》を 1 年間受講したときには、何だろう？ や
07 っぱりどこかで「えっ？氣は (***) そうなんですか～」とか、F 先生が「そうそうそう」
08 と言うけれども、感じないー どう「そうそうそう」なのかが (笑)、やっぱり、うん (0.5 秒)
09 理解、なかなかできない。自分のからだに多分起っていることは、F 先生はわかっているんだろ
10 うけれどもー

- 11 S:うん
 12 B:自分自身が分からないー
 13 S:うん、うん、うんー (1.0秒) 見えないもの、だものね。「君は今こうだ」って言われても
 14 「えっ」とかいうー

第3図 対氣後のA・Bへのインタビュー転記(付録1)からの抜粋

さらに、対氣において特徴的なのが、肉体(掌や手の甲)を全然触れあわずに、こうした<押す><飛ばす>という行為がなされている点であることは言うまでもない。熟練者同士では、からだを触れずに、<押す><飛ばす>という行為がしばしば行われていた。また、初心者に対しては、指導者から“からだの力を抜いて、”相手を感じて、といった助言がなされていたことから、“肉体で押す、”ということが対氣の行為ではないことが繰り返し伝えられていた。学習者が熟練者と対氣を行う場合、「今度は、手(を実際に触れあわせること)なしでやってみようか」という言葉がけがなされ、学習者はそれを受け入れて行っていた。

こうした“現実には手で押すことをしないで、<押す><押し返す><飛ばす>といった行為は、どのようなコミュニケーションなのだろうか。今回収集したデータの範囲では、十分な検討は出来ないが、II. 2節で述べた情報伝達モデルの考え方の枠組みを借りるなら、「送り手」が伝えるものは、腕力といった肉体的な力ではなく、それ以外のものであることになる。また、相互作用モデルの考え方に基づけば、やはり、明らかに相互作用がなされているにもかかわらず、媒介とされている記号が、言語としても非言語としても明確に特定できないということになるであろう。即ち、言葉をかけたから押されることもなく、腕力を使ったから押されるのでもない。これについては当事者達の構成する世界を検討することにしたい。

学習者の一人、Cは、対氣直後に感想を尋ねられて第4図のように答えている。ここでは、Cは、

対氣において初めて接触することなく相手とのやりとりをしたが(L53)、最初は「手がじんじんする」と何も感じないわけではないが(L55)、指導者の「分かる?」という問いに対しては「分かんなかった」と述べている(L57)。それが、対氣の中間点や最後の段階となると「何て言ったらいいのかわからない」と言語化できないながらも、「何か、何か来て、何か感じる」(L59)、「何か感じているな」(L63)と接触しないでも「何か」を感じたと述べている。ここで、59行目の「何か来て」という発言に着目すると、この前後から捉えても明確な推測をするまでには至れないが、「来て」という捉え方に、Cはこの「何か」を、相手(この場合、指導者のE)から「来る」もの、あるいは少なくとも自分の外から「来る」ものと感じているのではないだろうか。もしそのような感じ方をしているのであれば、対氣において相手や周辺から何か伝わってきて、それを自分が受け止めるという情報伝達モデルの枠組みで捉えられるコミュニケーション観をCは持つことになる。しかし、それが「何」であるのかを、Cは語ることはしていない。

一方、熟練者のFは、<押す><飛ばす>といった行為について、第5図のように語っている。この抜粋の部分は、Fが同じく熟練者のEを相手として行った場合についての発言である。Fは対氣の時に起っていることをここで二つに分けて説明している。EとFとの対氣は一般に“微細な氣を敏感に感じ取り、なおかつ時に激しい反応をすることがある、”ことが背景的文脈としてあるが、一つ目は、そうした場合のEの反応について自分

が「仕掛けている」(L98)という場合であり、二つ目は「全然」(L111)働きかけをしないときでもFが「自分のからだをゆるめ」「からだの調整をして」「ゆるんだなと思ったとき」(L104-107)であるという。こうしたFの述べる一つ目の場合は、FがEに働きかけ、Eが反応するということがあり、これは媒介となる記号が何であるかは分からないものの、FとEとの相互作用としてFが対氣を捉えているということであり、ここでFによって相互作用モデルが援用されているとみなしてよいであろう。Fが語っている二つ目の場合、自身のからだの調子を整える、整ったなと「思う」ときにEが反応するというのは、しかしながら、Fは自己のからだを内的に意識しているだけで、E

に働きかけているわけではなく、「氣を送ったり」(L110: 調査者の質問)も「全然」(L111)していないと述べているため、相互作用モデルにも情報伝達モデルにも当てはめられない現象を伝えていると考えられる。むしろ、この現象では、一方は自己のからだや内的感覚に意識を向け、他方は「飛ばされる」という激しいからだの反応に至っているため、ここでEとFとが何らかの共有をしているのか——コミュニケーションをしていると言えるのか——自体を最初に問う必要が出てくる。この二つ目の場合は、明らかに「方向性のある働きかけ」ではないので、後のIV. 2. (3)節で再びコミュニケーションとしての可能性を検討することにしたい。

対氣直後のCの発言

- 50 C:そういう感じと、あと
51 C:何か途中で、
52 S:うん、うん、うん
53 C:あの、接点なしに、立っただけでやったんですけど、
54 S:う～ん、うん
55 C:最初手がじんじんするだけで、
56 S:うん
57 C:で何かこう、「いい、分かる?」、「分かる?」って言われても分かんなかったんですけど、
58 でもまん中ぐらいから、その最後の方は——、ああ… 何と言うか… ええ、何て言ったらいい
59 か分からないんですけど、何か、何か来て、何か感じる——
60 S:う～ん、何か変わってきましたよね。顔色とかもすごい綺麗なピンク色になって——
61 C:ああ、ほんとですか
62 S:うん
63 C:何か感じているなというのがあって、でも、こう何でって言われてもわかりません、自分で
64 やってみろって言われても、こう、一人できるとは思わないんですけど——
65 S: (笑)

第4図 対氣後のCへのインタビュー転記(付録1)からの抜粋

対氣映像を見ながらのFの発言

- 98 F:はい、ええっと (3.0秒) 僕は対氣は、結構積極的に仕掛けているんですよ。それで、ええっと

99 Eさんがああいう風に反応するときというのは、たいていわたしがEさんに働きかけたんです。

100 S:んん

101 F:それで、それともうひとつは—

102 (3.0秒)《FとS、映像の音を聞いて“Eが声をあげてFに飛ばされる、シーンに目をやる》

103 S:こういうのは、ぴったり合っている？

104 F:うん、ぴったり。(1.0秒)で、もうひとつはあのう、ええっと、やるために自分がこう、自

105 分のからだをゆるめたときに、あ、ゆるんだなという風に働き— Eさんに働きかけているわけ

106 ではなくて、自分のからだの調整をして、自分のからだがそうっとゆるんだなと思ったときに

107 Eさんは反応する。

108 S:うん、うん

109 E:わたしがからだがうまく— 状態がよくなったな、というときに— (3.5秒)

110 S:—何か働きかけたり、氣を送ったりしていなくても

111 E:うん、全然。だから、そういう意識は無くて、自分のからだの調整だけしているときでも、

112 (1.5秒)あの、そうなります。はい。で、逆に、さっき最初に言ったときみたいに、ええっと

113 仕掛けてるときも、すっと感じるんですよ。例えばわたしが彼の中心を捉えに行って、捉えた

114 と思った瞬間に、あの、笑い出すんです。「ああ、つかまった」と言っているのは、わたしが中

115 心をふっと捉えた時「つかまった」という。

第5図 対氣後のFへのインタビュー転記(付録1)からの抜粋

IV. 2 二者の協調性

IV. 1節では、どちらか一方が他方へ働きかける、という方向性のあるコミュニケーションを扱った。こうした枠組みからは捉えられないこととして、映像データ中で顕著に観察されたことが、「両者が一緒に何か(一つのこと)を行っている」と見て取れる動きであった。これらは、対氣を行う二者が一つの動作、一つの行為を協調しながら行っており、こうした動作、行為を共有しようとしているという点で、一つのコミュニケーション形態であるとみなせる。対氣におけるこのような「二者の協調性」というコミュニケーション形態を、データから検討した。

第6図・第7図では、両者が「同時に笑う」「同時点で急に激しい動作を始める」ことをしている映像を捉えたものである。こうした「両者が一緒に何か(一つのこと)を行っている」と捉えることの出来る動きの中には、両者が同じ動作を行っ

ていることが観察され、各々の動作がほぼ同時に一致して進む場合が観察された(同時に姿勢を傾ける、同時に笑う、など)。また、動きの方向や性質は異なりながらも、両者が一つの動きを共有していると見て取れる場合もあった(両手の甲を重ね合わせたままそれを両者が回す、一方が「あっ!」という表情をし同時に他方が笑うなど表情は異なるものの表情を同時に変化させる、など)。

こうした「二者の協調性」に関し、分析を進めるうち、各々の動きに同時性がない場合でも、対氣で組んだ二者によって「一緒に一つのことが行われる」と見て取れる場合、そこに協調性があるのではないかと考えるようになった。ここで、こうした協調性という点から、IV. 1節で扱った<押す><押し返す><飛ばす>という動作・行為を再度振り返ってみたい。まず、<押す><押し返す>という動作は、どちらかが強く押して他方がそれを押し返すといった場合もあったが(Aと



第6図 DとE：同時に笑う



第7図 EとF：同時点で急に激しい動作を始める

Cが指導者EとFと行った時)、多くの場合には両者は、手の甲を合わせ、円を描くように合わせた手を柔らかく回し、両者の間を行き来させていた。これは、当事者達にとっては“互いに相手を感じ合い、”氣をめぐらせる、動きである。この動作は<押す><押し返す>という動作であるが、同時に“相手を感じる、”こともなされていると見て取るなら、<押す>行為も押す側が一方的に<押す>という働きかけを行うだけでなく押される側が同時に<押される>ことを受け止め感じる行為ともなっていると観察できる。つまり、<押す>行為は、押す側の働きかけであると捉えこともできるが、同じ行為に対してこれとは異なった見

方を取り、二者が重ね合わせた手を共同で行き来させている・一緒に回していると見て取ることが可能である。

同様に、<飛ばす>という行為も、飛ばす側と飛ばされる側が互いに“相手を感じる、”ことをしながら一緒に行っていると見て取った方が適切だと判断できる場合があった。以下のIV. 2. (2)節とIV. 2. (3)節で検討するが、映像から両者の非言語要素を観察すると、飛ばされる側のからだの傾きや後ろに下がるという<飛ばされる>動きが先行するかのように飛ばす側の手と腕の<飛ばす>行為が起る場合や、当事者の表情に着目すると飛ばされる側が飛ばされることを感知したように表情を変化させたり、飛ばす側・飛ばされる側が両方とも笑うと同時に<飛ばす>行為が生じる場合など、<飛ばす>行為が飛ばす側の一方的な働きかけであると捉えるよりも、両者が対氣において協調しているからこそ起りえたと推察できる種類の動きが少なくない⁸⁾。

もう一つ、着目できることがある。対氣は、一般に<押す><押し返す>という動作が幾度か繰り返された後、飛ばす側にいる者が相手を<飛ばし>て一回を終える。IV. 1節でも述べたように、調査対象とした対氣の現場では、指導者が学習者に「押し方」や「飛ばし方」を練習経験の中で伝えていたが、そのどちらかが<飛ばし>た後、指導者から「もう一度！」とか「今度は交替して」といった言葉がかけられ、学習者はそれに従っていた。このような動きを映像データから観察すると、こうした対氣の繰り返しの指示や、組になって何セットかを行い対氣を終える指示は、ある程度の多様性はあるとしても、対氣を行う際にもともと決められていたり構造化されている対氣の手順であるとみなせる。すなわち、対氣で向かい合う二者は、ゆるい範囲であっても、決められた動きに従うことからはずれることはせず、そのことによって対氣という行為を成り立たせている。そして、学習者は「そのように動く」ように指導者から指

示され、「そのように動く」ことが対氣の形式であることを学び取っている。このように考えると、一組の対氣を全体から捉えるならば、“形式に則って対氣を行うこと”、自体が二者の協調性によって成立している行為であるとみなすことが出来る。

以上のように捉えると、IV. 1節で扱った「二者における方向性のある働きかけ」というコミュニケーションも、新たな見方をすることが出来る。即ち、相手に対して働きかけるといった動作がなされる際にも同時にこうした動作自体が二者の協調性というコミュニケーションのもとになされていることがあると考えられるのではないだろうか。また、二者が協調しなければ対氣という氣功修練自体が成り立たないという側面が、どのような対氣であれその根幹に存在すると言える。そのような協調性は、二者で一緒に対氣という行為を共有しつつ形成していく過程そのものとして、対氣において重要なコミュニケーションであると捉えることが出来る。

調査で得られたデータを詳細に分析した結果、そこで生じている協調を生じせしめるものとして、

- (1) 両者が予め決められた意図に従っている場合、
- (2) 両者の身体そのもの、身体知の働きによる場合、
- (3) 両者の間で意識やイメージが共有されている場合、

があるのではないかという可能性を各々検討したい。ただし、(1)～(3)のいずれか一つによる場合だけでなく、これらの組み合わせによって協調性が生まれる場合もあるだろう。以下のIV. 2. (1)節～IV. 2. (3)節で各々について分析していきたい。

IV. 2. (1) 予め決めた意図に起因する協調性

上で述べたように、対氣では<押す/押し返す><押す/飛ばされる>という動作が予め対氣を

構成する一単位として決められている。さらに「両者が右足を踏み出し、互いの右手をあわせる構えから始める」「飛ばされる側に位置する人が丹田から押し出す形で合わせた手を動かす」といった対氣の方法や手順もおよそ決められており、こうした方法・手順には比較的ゆるいものとそうでないもの、ローカル・ルール⁹⁾などがある。当事者は、互いに協調し合いながら、対氣そのものを構成する決まり事は守り合い、方法やローカル・ルールなどはある程度の柔軟性を持って相手と協調させていた。

また、「もっと強く押して!」「今度は手を合わせないでやってみよう!」等、一方が相手に言葉がけをして、相手が従うという形の二者の合意によって動作の協調性が生じている場合もあった。

IV. 2. (2) 身体そのもの、身体知による協調性

映像データから観察されたことの中には、“両者が前傾姿勢をとっていたのに、ほぼ同時にゆったりと立って向き合う”といった予め決めて意図して行っただけではない動作や行為が観察される。これらの中には、一方がまず働きかけ、他方がそれに反応する形で協調する場合と、ほぼ同時に両者が動作を協調させている場合とが観察された。

また、IV. 1節でも扱った<押す><押し返す><飛ばす>といった動作の中には、腕力を使ったのでは明らかになく、ほんの軽く手を触れるか、あるいは全く手を触れあうことをせずに、一方が他方を<押す><飛ばす>ということも行われていた。こうした動きの中に、肉体の動きのみに着目する限りでは、一方が押したから、他方がその結果として押された・飛ばされた、というよりは、

(1) 一方の押す動作にからだを添わせるように押される・飛ばされる、さらには(2) 押す動作を先導するかのようには押される・飛ばされる、(3) 押す動作がないのに押される・飛ばされる、とい

うことが観察された。(2)(3)は、熟練者同士の場合のみ)。

こうしたことを、どのように捉えていけば良いのだろうか。(1)については、映像データで、飛ばす側が明らかに腕力を用いておらず(熟練者同士の場合は手を触れ合わせてもいないことが多い)、それでも押す動作とほぼ同時に、飛ばされる側がその動作に応じてからだを傾斜させて後ろに飛ばされる動きが見られた。また、(2)も映像から、飛ばされる側に位置する人が笑ったり後ろに退くといった表情・動きの変化があった後で、飛ばす側の人が飛ばすしぐさをするということが観察された(DとE、EとFとの対戦)。これは一見すると、“押す動作を先導するかのように押される・飛ばされる”場面として観察できる。こうした映像は、腕や手の動きだけで捉える限り、原因(=押す)と結果(=飛ばされる)が同時に起る、さらには逆転している、ということであり、理解しがたいことのようにも見て取れる。また、上の(3)押す動作がないのに、押される・飛ば

されるは、DとE、EとFとの対戦の映像データで観察され、このとき押す側の当事者は表情を変えるなどの何らかの身体的な動きをする場合もしない場合もあるが、それでも押される側が<飛ぶ>という現象が起きている。

こうした行為について、ここでも当事者達が語っていることを捉えていくことにしたい。第8図のインタビューの転記の抜粋において、学習者のCは対気について、自らの専門であるハンドボール競技で自分が持っている感覚に置き換えて、対気のやり方をつかんでいると述べている(L77,79,81,83)。ついで、それは自らが意図する動きを行う際にも、自分の意図することだけでなく相手の動きを感じながら動くということであると説明している(L81,83,87,89,91,93)。Cにとって、“相手を感じる、という身体感覚が、その結果、手を触れていてもいなくても、<押す/押される><押す/飛ばされる>という行為を生んでいるということになるのではないだろうか。

対気直後のCの発言

- 77 C:あのう、わたしハンドボールやってて対応動作じゃないですか。
- 78 S:うん、うん・・・ あ、そうか
- 79 C:でー そう。で、相手がやっぱりー 例えばディフェンス・オフENSEの関係で、
- 80 S:うん
- 81 C:相手がかわして動こうとするのに対して、それを読んで、
- 82 S:うん、うん
- 83 C:こう付いていくっていうのは、まさしくこういう感じなんですよ。
- 84 S:あッ、そうか～
- 85 C:そうです
- 86 S:そのアナロジーで行くんだ～
- 87 C:はい。だから、あのう、オフENSEも、まあディフェンスを感じながらやっているし
- 88 S:うん、うん
- 89 C:自分だけの、こう～、
- 90 S:うん
- 91 C:じゃなくて、ま、やりたいことがあるけれども相手のことを感じながら、

- 92 S:同時に、同時に、感じながら、
 93 C:ですね
 94 S:あ、そうかそうか、それはすごい。

第8図 対氣後のCへのインタビュー転記(付録1)からの抜粋

一方で、熟練者の一人Eは、対氣後のインタビューにおいて、対氣中の行為について第9図のように語っている。Eにとって、対氣のときに身体感覚として捉えられることやそれに伴い自ら表出することは、相手(この場合F)の“氣”による

ものであるのか(情報伝達モデル的捉え方)、自分のからだの変化(相互作用モデル的捉え方)であるのかを「詮索」するようなことではない(L322-323)。そうではなく、「からだを感じているもの」(L320)に従っているだけだと述べる。

対氣映像を見ながらのEの発言

- 320 E:えっとからだを感じているもの、
 321 S:んん
 322 E:を、えっとそのまま——ていうか、それがF先生とか、F先生の氣なのか、僕の、おう、
 323 からだの変化なのか、そういうことは、一切、詮索しないです。
 324 S:ただ、何か来たなとか
 325 E:はい
 326 S:何か繋がったなとか・・・ ——でそのときの感じているからだは、どういうからだ?

第9図 対氣後のEへのインタビュー転記(付録1)からの抜粋

こうしたデータだけでは十分なことは解釈できないが、これらの対氣の当事者にとって、対氣中で生じていることとは、相手を、または環境世界を、「からだ」の感覚で受け止めるということだと考えられる。そうであれば、当事者達にとって、対氣中の彼らの身体では、相手や環境世界の変化を受け止められるようなアンテナをもてるように自分を開いておくことがなされているのであり、それは相手や環境世界に開かれたチャンネルを持っていること、即ち、既に相手や環境世界と潜在的に協調している、ということになるのではないだろうか。もしそうであるなら、少なくともそうし

た身体感覚を持つ当事者達にとっては、肉体的な要因(腕力)による働きかけ・言葉による働きかけだけでは説明できない、身体感覚によって捉えられるコミュニケーションが成立しているということではないだろうか。それは、コミュニケーションの情報伝達モデル(即ち、自ら意図したことが伝わったならコミュニケーションが成立するとみなす考え方)にも相互作用モデル(即ち、記号を媒介とした相互作用があればコミュニケーションが成立するとみなす考え方)にも完全には当てはめることの出来ないコミュニケーションである可能性がある。

当事者達の世界においては、対気中の身体感覚が“相手を感じて”いる感覚であったり（ここではCの場合）、感じようとする対象への意識は捨て去り、あるいは絞り込まずにあらゆるものへと感覚を広げていってそのときからだで受け止める感覚であったりしている（Eの場合）。そうであれば、その身体レベルにおいて相手の身体と、あるいは世界と向き合っている、ということになるだろう。これを、金子明友の言う身体知の働きとして説明することもできるし¹⁰⁾、また、身体論や身体コミュニケーションの研究領域で提示されている自己と他者、自己と環境との身体リズムの共有・共調・共時的な動きや行為として捉えることも出来るかもしれない¹¹⁾。そのような可能性を考えるならば、ここで生じていることは身体そのものや身体知によってなされる協調性であり、身体と身体、身体感覚と身体感覚、身体感覚と環境世界とのコミュニケーションだと言えるだろう。

IV. 2. (3) 意識やイメージの共有による協調性

「二者の協調性」の中には、特に注目に値することが観察できた。これについては、今回収集したデータのみから明確なことを述べるのは事例数に乏しく、類似の事例をより多く集められたならばこれを比較検討していくという、慎重な追調査と研究が必要であろう。しかし一方で、対気をコミュニケーションとして捉えていく上で重要なことを示唆しているため、ここで言及しておきたい。

映像データから観察されたことの中で、当事者の動作と表情との関係に着目すると、“両者が微笑みあう、「ほら！」とか「やられた！」とでも言うかのような表情を交換した直後にく飛ばされる>”といったことが観察された。連続的な動きと表情との関係を見ていくと、そこで観察される表情の変化の組み合わせの中にも、一方が表情を変化させ、他方の表情がそれに反応するといった場合と、ほぼ同時に両者が何らかの表情を浮か

べるといった場合とが観察された¹²⁾。

こうしたことは、IV. 2. 2節の身体そのものや身体知の変化と緊密に関わって生じていると考えられる¹³⁾。しかし更にここでは、身体レベルの協調性というコミュニケーションに変化が起ると同時に、対気の当時者達の意識の上でも何らかの変化が感じられている可能性があるのではないかと推測できる。一般に、表情はある種の「感情の表出、伝達」（大坊、1998b）と捉えられている。表情の変化やそれが動作を先導するという事は、当事者達が身体で感覚し、動くことから協調して動作を連続させていくだけではなく、起りつつあることを感じ取っている・イメージしている状態にあると推測できる。つまり、表情で観察できることは、当事者達が、起りつつあることを内的な何らかの意識やイメージとして感覚できている可能性を示唆している。この‘感じているという意識’は、予め意図したことや目的に沿って「意識的に」行う際の自覚的な意識のあり方、「次はこう動きたい」と思考において意図してそれを具体化する時の意識のあり方とは言えないだろう。むしろ、何時の間にか自分がニコニコしていたのにはっと気づき、その場の雰囲気心地よいものであることに後から見て取るといった場合とよく似た、身体感覚と共振しある意味「無意識」という用語でも呼べるような、言語化できなかつたり言語化しにくい意識やイメージの領域で生じる、内的な経験なのではないだろうか。このように、当事者達が、身体感覚で捉えられることから何らかの協調性を持ち、コミュニケーションをするのと並行して、意識やイメージのレベルでも何らかの協調性をもつこともあるのではないかと推察した。

これについても、当事者達を感じていることを参照するならば、例えば既に挙げた第5図のFの発言で、EとFとの間で、L106~107「自分のからだの調整をして、自分のからだそうとゆるんだなと思ったときにEさんは反応する」というこ

とが伝えられている。この発言は、「からだの調整」に対してEがからだで反応した、という身体レベルの協調性を伝えているとも解釈できるが、同時に、「ゆるんだな」と「感じている意識」がEの反応となって現れた、とも捉えることができる。実際に映像では、熟練者のEとF（そしてDとE）との対気においては、観察できるような身体的な動きがどちらにもないのに、ある時点で、向き合っていたEとF（D）が同時に笑う、F(D)が笑い同時にEが笑って飛ぶ、といった変化が観察された。こうした「笑い」に関しては、それがどのような内因的な契機から発したのであれ、わたしたちはそれを社会的なシグナルとしてそこから当事者の何らかの気持ちや内的状態を読み取ることができる（van Hoof, 1972）。そして、たった一人で「微笑む」のではなく、二者の「笑い」の同期は、身体的な協調性だけでなく、意識のレベルでの協調性が生じていると見て取ることができるものである。相互作用の中で共に生じさせている表情の変化の中に、当事者達の何らかの意識、イメージの共有過程、即ちコミュニケーションが生じている可能性を否むことはできないだろう。

V. 考察

第IV章では、対気をコミュニケーションとして捉えるなら、本研究の調査対象において二者の方向性のある働きかけ（IV. 1節）と二者の協調性（IV. 2節）というコミュニケーションが観察できることを述べた。そして、各々の詳細をデータから読み取れることに基づいて分析した。一方が他方に働きかけるというコミュニケーションは、〈押す〉〈押し返す〉〈飛ばす〉といった動作として対気を構成する主要な要素であり、対気の学習者たちはここで適切な身振りを学ぶことを行っていた。また、学習者A、Cと指導者E、Fとの組み合わせの対気の前半部以外では、こうした動作が肉体や腕力に依らずに、時には触れずして行われていたことは、コミュニケーションとしての

対気が目立つ特徴であった。そして、当事者達は、こうしたコミュニケーションを情報伝達モデルの枠組みで捉えている場合も、相互作用モデルの枠組みで捉えている場合もあった。

一方、同じデータに対して、当事者達が「一緒に何か（一つの事）を行っている」と見て取れる動きを二者の協調性として着目すると、そこには彼らが身体・身体感覚や意識のレベルで何らかの事を共有していく過程があるのではないかと考えられた。そうした共有は、予め取り決められたことに意図的に従うことによって生まれる場合もあると考えられるが、当事者達の発言に注目すると、対気を行う二者が互いに相手を感じつつ同調的な動きをしたり変化に反応していくことに基づく場合もあるのではないかと想定できた。そしてそうした同調は身体感覚や身体知による場合もあるが、それと同時に意識やイメージが共有されている可能性もあるのではないかと推察した。

以下では、ここで見てきたコミュニケーションが、わたしたちにとってどのような可能性を持つものなのか、そして潜在的にどのような可能性を開いていくものなのかについて考察していきたい。

V. 1. “コミュニケーション”として捉えた際の「対気」の可能性

今回対象とした「対気」の現場はごく限られた範囲であったにも関わらず、そこにはコミュニケーションとしての豊かな多様性が観察される。第IV章で分析した「二者による方向性のある働きかけ」と「二者の協調性」は、対気を行っている当事者達の映像を分類して振り分けられるような種類のものではなく、対気中のどの場をとっても、それぞれが幾層にも折り重なって生じていたと言えるようなものである。例えば、対気中の当事者達が〈押す／押し返す〉を繰り返すとき、その両方、あるいはどちらか一方が、ひとつの動作としては〈相手を押す〉を行いながら、「力を抜いて」「相手を感じて」等という当事者たちがよく口に

する技法を心掛け、自らの感覚や意識を相手や周囲の環境に開いていき、相手や環境と身体や意識のレベルで共振していく、ということが起り得ているのではないだろうか。

また、今回の調査で発見できたコミュニケーションの形態として、対気の現場に参入する初心者、学習者が<押す><押し返す><飛ばす><飛ばされる>行為を指導者と練習する中で、“対気を行う、ための身振りを学び取っていく過程が観察できた。ここで、学習者達は“どのような身振りが対気（としての<押す>など）として意味をなすか、を指導者の指示や評価を指針に繰り返しやってみることによって、掴もうとしていた。このような学習のコミュニケーションは、情報伝達モデル（例えば、適切に“氣、や力が伝えられるかを基準とする考え方）でも相互作用モデル（例えば、自分の押し方で相手が<飛ぶ>という反応をするかを基準とする考え方）でも説明することが可能である。しかし、最初の「全く分からない」と述べられている段階から「今、このように、対気をしている」という段階に移行する過程までは、言わば「言語ゲームが成立する以前の段階、であり、「なぜいかにして『意味している』ことが成立するかは、ついにわからない」「命がけの飛躍」がなされなければならない¹⁴⁾。

こうした学習者による対気習得のコミュニケーションは、初心者のみが関わっていることではないかもしれない。今回の調査結果から直接に推測することは出来ないが、対気の当事者たちは、組になる相手を替え、練習する場所や時間を重ねて、対気についての経験を重ねていく。その中で、対気という修練を類型化したり、相手や場所の変化に応じて対気として意味をなすことの幅や多様性について体系化・構造化の過程を繰り返したり、対気を行う自らや正に“対気そのもの、の本質に関して様々な経験を内在化していくだろう。対気を重ねるたびに対気の現場にいる自ら、相手、そして環境が経験として折り重なっていくことは、

当事者達全てに起こりつつあることであり、その全てが、ある意味、“対気を学ぶ、コミュニケーションであるとみなすこともできる。

そして、本研究が捉えた「対気におけるコミュニケーション」は、当事者達にとってこれが“氣の交流、であるという点が、最も特徴的であると言えるだろう。本研究は、第I章で述べたように“当事者たちにとっての現実、を描くことを目的としており、映像から観察できること、及び当事者達の感じていることや考えていることのうち質的調査になじむことを扱ってきた。従って“氣、の存在やその性質について踏み込むのは本研究の対象外であるが、映像データでは、対気として腕力を使わず、ましてや熟練者同士は触れ合わずに押す・飛ばすことが観察された。ここで、当事者達は対気の現場ではこうしたことを当たり前に行い、目にしていたが、インタビュー調査では自らの感じたことについてほぼ全員が言語化するのに苦心しつつ語ってくれたものの、こうした現象が何であるかについては「分からない」「語れない」としていた。むしろ、対気の現場では、「力を抜く」「頭で考えない」「相手や自分を感じる・捉える」ということが学習者に促されており、現象を現象としてそのまま受けとめ、どのような現象に対してもその場で起ったこととして流し、理論的思考による追究をしないことが一般的な態度として認容されているのではないかと推察した。

しかし、少なくともこうした現象に関して理解していく一つの切り口として、IV. 2節において観察した「二者の協調性」、なかでも身体感覚や身体知、意識やイメージのレベルでの協調の可能性は、更なるデータを集め、検討していく価値があるだろう。これは、他者（この場合、対気の相手）という外部からの肉体的な力やその強度を受け取り、その結果として反応するといったコミュニケーションではなく、他者や環境へと自らの身体、身体感覚、意識などを開き、新たに開かれた領域で生じていることを受け止めたり、新たな動

きや変化が生ずるのに任せたりするというのではないだろうか。当事者達の他者に開かれた内面からの感覚や動きがここにあるのであれば、そのコミュニケーションは、もはや単純な情報伝達モデル、相互作用モデルで説明できるようなパーソナル・コミュニケーション以上のものとなっている可能性がある。対氣において、学習者に「相手を感じる」「リラックスする」といった声かけがなされていることが、こうした可能性を切り開くものであるとすれば、情報伝達モデルでも相互作用モデルでもない、新たなコミュニケーションの次元を考えていかなければならないであろう。

V. 2. 「対氣」におけるコミュニケーションの潜在的な広がり

V. 1 節で述べた通り、対象の現場におけるコミュニケーションには豊かな可能性があると考えられるが、これらはわたし達にとって、コミュニケーションとして更なる深みや広がりを暗示するものではないだろうか。対氣の現場においては、当事者達が「そこで生じていること」や自己の感覚・意識を相手と確認し合い修正を重ねることによって、自ら感じていることを広げたり深めたりし、《自己と他者という個人個人が単独の存在であり、その上で二者の関係性が築かれる》といった一般的なコミュニケーションの枠組みを超えた自己のあり方や自他の繋がり・関わりを潜在的に体験している可能性は充分にある。

濱野清志は、気功体験を論じて、身体と心とのつながり、そして「自分」と「環境」とのつながりが一体となって感じられる感覚の体験を描いている（濱野、2008）。

（前略）身体の芯がゆるむと頭の芯もゆるみ、それにともなって心がゆるんで「自分」という意識がつくっていた自己の境界線が、硬質なものをから柔らかなものになっていく。心も身体も別々のものではなく、心のはたらきが身体に

染みとおり、身体の反応が、心を生み出す流動的な「氣の流れ」を体験するようになるのだ。心も身体もともに、根源の「氣」の一部分にすぎない。

心と身体の流動化の体験はさらに展開して、「自分」と周囲の「環境」との融合体験につながっていく。私が私であり、足下にある地面は地面、空は空、建物は建物というように、それぞれ個物として存在しているのが日常の風景であるとするならば、気功体験のさなかでは、根源の「氣」が私となって現われ、地面として現れ、空として現れ、建物として現れる。「自分」も周囲の「環境」も同じ根源の「氣」の現われとして、ひとつながりとなるのである。

気功の体験はこのようにして、自分自身を他者と切り離され孤立した単体としてではなく、すべてのものがつながりあって影響し合っているという静かな興奮のなかで、そこにその一部として抱かれた自分をとらえる体験となるのである。

濱野が描いているような感覚は、今回調査した対氣の現場でも十分に起り得るようなことかもしれない。例えば、内的な身体感覚や意識を他者や世界に対して開いていくとき、または対氣における相手との交流によって意図せずして感覚が開かれてしまったとき、自分と相手、手と手、力と力、意識と意識の間に何か伝わる（情報伝達モデル）とか、何かの行き来がある（相互作用モデル）といった図式では説明できないコミュニケーションが生じることもあるのではないだろうか。手と手で<押す>ことをするはずが、手以外のどこか別のところでも相手と触れ合っている、相手の手以外の部分を自らに感じる、ということが起り、力と力で<押す>ことをしていたのに、相手の力以外のものによって自らが作用を受けてしまう。自己の内部、思考の中に閉じ込めていたはずの自らの意識が、相手のそれを感じ取り、さらには出遭

ったり融合したりして、突然相手の情緒的な何かを緩衝を入れずに感じてしまったり、急にどこからともなく嬉しい気持ちがやって来て笑い出す。そして、頭で描いていた相手との関係性が薄れ、境界線が引かれていたはずの自己と他者、自己と環境との境界が途切れ、《共通の広がりの中で何かを感じられる》《広がりの中で何かが起こる》といった感覚が起ってくる。

こうした体験は、従来は主観的な体験として語られることが多かった。しかし、本研究の調査で収集した映像データでは、少なくとも対気を行う二者が同時に、あるいは互いに協調し合いながら、身体的な動きや表情を微細に変化させることが観察された。従って、一人の人間の個人的体験を超えて、コミュニケーションとしての対気をさらに研究していくならば、少なくとも二者の間で間主観的・間身体的につながりや一体感が感じられているのをわたしたちは確かめることが出来るかもしれない。

対気をコミュニケーションとして捉えるなら、そこには、言語によって思考で区切れる領野、肉体だけに焦点を当てた物理的な視野とは異なる視野から、わたしたちの潜在的なコミュニケーションの深みや広がりを探っていく可能性が開けている。そこには、わたしたちが自らの存在や感覚・他者との関係性・生命観・世界観について捉え直

していく機会が豊かに広がっているのではないだろうか。

V. 3. 今後の展望

本研究ではコミュニケーションとしての対気に焦点を当てて、対象とした「対気」の現場で得られたデータから明らかに出来ることを可能な限り綿密に検討することを試みた。ここで明らかに出来たことは限らない可能性や潜在性があると予測できるが、本研究で調査対象とした現場はごく限られたものであり、映像データから観察できる事例は少数であるため、その可能性や潜在性に関して述べたことも十分な論拠をもつとは言えない。また、対気の中で起り得るコミュニケーションの可能性や潜在性は、もしかするとここで発見できたことよりも遥かに大きなものであるかもしれない。そうしたことをきちんと捉えていくためには、少しでも多くの対気の現場、多様な対気の当事者たちに対しての調査分析を重ね、同時に他にもどのような切り口からの研究が可能であるかについて、検討を重ねる必要があるだろう。現段階では、「気」の本質に直接切り込んでいくことは困難であると考えますが、対気という幅も奥行きも広い修練の場で営まれている当事者達のコミュニケーションという現象を、幾つかの切り口からほんの一面でも明らかにしていきたいと考える。

注

- 1) 一般的に、コミュニケーションは(1) イントラ・パーソナル・コミュニケーション、(2) パーソナル・コミュニケーション、(3) マス・コミュニケーションの三つに大別される(哲学事典(1971) 平凡社, 東京 pp509-510.)。対気は、個人間のコミュニケーションと捉えることができるので、この点ではパーソナル・コミュニケーションであると言える。
- 2) 本研究では、特定の「現実が存在する」ことを否定することをせず、そうした現実がその特定

の現場において、どのように人々によって実際に生きられ、実践され、社会的なこととしての場を与えられているのかを詳しく記述していかうとする「社会構成主義(social constructionism)」の立場(例えば、Derek Edwards(1997) *Discourse and Cognition*. Sage, London.を参照)を援用する。わたしたちの日常生活は、それがどのようなものであれ、一貫性を持った世界としてそこに生きる人々に解釈され、かつまたそうしたものとして彼らにとって主観的に意味のある一つの現

実としてあらわれている（バーガー, P. L., ルックマン, T. 日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法. 新曜社, 1977.）。この立場に立つならば、自然科学においても、日常生活においても、様々な流派の東洋的な修練の場においても、各々の「現実が存在する」のであり、本研究では、氣功の現場における「現実」がいかなるものであるのかの一部と、現場の映像との相互関係を丁寧に読み解いていくことを目指したい。

- 3) 金子明友は「生命的身体のもつ運動能力」を「身体知」と呼んでいる。金子は、ニーチェを援用して、身体を「一つの大きな理性」と捉え、「この理性は自我を行わないで自我を行為する」と説明付け、その「自我身体こそが根源的な知性を統合する」作用をもつものだと考える。そして、私の身体による「動感運動」（動きつつ感じ、感じつつ動ける身体の運動）こそが、その「大きな理性」の顕現であると主張する。この金子の身体知理論を借りれば、対氣の初心者は、「対氣として」動き、同時にそれを感じるといふ身体のあり方を掴んだ段階で、「対氣をするわたし」として存在していることになる。（金子明友(2007) 身体知の構造: 構造分析論講義. 明和出版, 東京. および金子明友(2007) 身体知の形成. 上・下. 明和出版, 東京.)
- 4) ここでは、一定の事柄を指し示したりその事柄の性質やイメージを想起させる対象物全てを「記号」として扱う。一般には、コミュニケーションにおいて、身振りや動作、表情などの非言語メディアは記号であるが、その最も代表的なものは言語メディアであると言えよう。しかし、本研究の場合、対氣を研究対象とするため、言語メディア（現場での言語的なやりとり）も含め、非言語メディア（当事者の動作、表情等）を中心に捉えていくことになる
- 5) メモのとり方は、質的調査の考え方に則り、現場で見て取れる事実中心の詳細なメモから、

初期に観察したことと関係付けるより理論的なメモまで、多層的に行った。（Strauss, Anselm L(1987) Chapter 5: Memos and memo writing. Strauss, Anselm L. *Qualitative Analysis for Social Scientists*. Cambridge University Press, Cambridge. pp109-129.）

- 6) 調査者と被調査者との一定の信頼関係のこと。Dは(B)の練習会で毎週E、Fらと共に会の「一員として」練習をしており、(A)の現場ではA、B、Cとは初対面であり、「調査者、かつ氣功練習にある程度習熟した者として」紹介された。一般に、質的調査におけるラポールとして「過度な親密さ」は好ましくなく「ある程度の親密さ」「適度な信頼関係」が望ましいとされている。（桜井厚(2002) II 社会関係としてのインタビュー. 桜井厚. インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方. せりか書房, 東京. pp63-103.）
- 7) ここでは、コミュニケーションにおいて言語メディアや非言語メディアを取り巻き、当事者達が共有していくことに何らかの影響を与える諸要因全てを「文脈」と呼ぶことにする。特に、コミュニケーションとしての対氣において、対氣が始まってから特定の時点に至るまでに相手と築き上げてきた身体感覚や関係性を、ここでは捉えていきたい。また、当事者一人一人が、それまで行ってきた対氣において体験的に集積してきた技法を含む心身や感覚の使い方・対処の仕方が、特定の現場にどのような影響を与えているかを捉えたいと考える。
- 8) このことと関連して、対氣を行う二者の協調性は、当事者A~Fの組み合わせ（学習者同士は組まなかったため、全部で12通り）のうち、全ての組で観察されたが、一方で、<押しでも／押しされない><押しでも／飛ばされない>、さらには一方が<押し>が他方が「わからない」といった風に首をかしげるといった非協調性、いわば対氣両者のディスコミュニケーションも

観察されたことを挙げておきたい。こうしたディスプレイコミュニケーションは、IV. 1節において取り上げた学習者が押しても指導者は<飛ばされず>もう一度繰り返すことを促された場面の他、AとD、CとDの組み合わせの対気で熟練者が学習者を<押す>時にも観察された。特にCとDの組においてDがCを押すときにはDが押してもCは飛ばされず、Dが飛ばす動作をしてもCは飛ばなかった。因みに、D(本論文の著者)は一応熟練者ではあるが、E、Fと比べ、氣功指導の経験はなく、初心者と対氣を行う経験も多くない。また、腕力もない。しかしまた、Dは他の熟練者EやFとの対氣においては、<押す><飛ばす>という行為を成立させることが出来、ときには激しく飛ばすということも行っていた。こうした非協調性に現れる“氣を感じる熟練者は<飛ばされる>が氣を感じること自体を学習中の学習者は<飛ばされない>、”という現象も、比較対照できるデータを積み重ねた上で、コミュニケーションとしての対氣の特徴として、更に検討する必要があるだろう。

9) 学習者のAとCに対しては、指導者達は「両手で強く相手を押す」という動きをするように促していた。一方、指導者のEもFも、学習者Bと対戦するときや、互いに対戦するときは、片手の甲を相手と触れ合わせたり、手を全く触れ合わせないで対氣を行っており、「片手で対氣をするか両手で行うか」「手を触れ合わせるか合わせないか」等はその場や対戦相手によって、柔軟に替えていた。このような場面を観察すると、当事者達、特に指導者達は、<押す/押し返す><押す/飛ばされる>といった対氣の型は守りつつ、その型のやり方自体はある程度柔軟に組替えていると観察できた。

10) 金子は、生命あるものの運動には「自ら動きつつ感じる」という主体性が存在し、この主体性の原理に基づくなら、「初めて他者の主体性に架橋する可能性が生まれ」と述べている。

私が他者の運動を見るとき、それを物体運動と見ないためには、そこにヴァイツゼッカーのいう<根拠関係>が成立しなければならないのです。そのような私と君の相互において、お互いに動いている感じのわかる身体が共有できるのでなければなりません。お互いの主体の<あいだ>は生身に即した動ける感じを共有できる関係系、つまり、根拠関係のなかで初めて成立するのです。

(金子明友(2005) 身体知の形成: 上. 運動分析論講義・基礎編. 明和出版, 東京. pp21-28.)

ここで金子が述べていることを、本研究で扱ってきたコミュニケーションという観点から捉え直すなら、「動きつつ感じる」ことの出来る氣功の当事者達の身体は他者のそのような身体と身体知レベルでの共有、即ちコミュニケーションを行っている、と述べる事が出来る。

11) 身体的なコミュニケーションを研究する諸領域では、人が他者や環境世界と身体的な動きや声を同調させる、共振・共鳴・エントレインメント(entrainment、「惹きこみ」ともいう)といった現象が報告されている。人間には外の生命世界との響存性があることが、子どもと子ども(あるいは母親、環境世界)、スポーツや踊りの世界、熱帯雨林に住む人々と環境世界などの事例で示唆されている。(やまだようこ(1996) 共鳴してうたうこと・自身の声がうまれること. 菅原和孝・野村雅一編. コミュニケーションとしての身体. 大修館書店, 東京. pp40-70.、市川浩(1975) 精神としての身体. 勁草書房, 東京.、山田陽一(2000) 第6章 自然と文化をつなぐ声、そして身体: 音響身体論へむけて. 山田陽一編. 自然の音・文化の音: 環境との響きあい. 昭和堂, 京都. pp191-218.)

12) 15年間の氣功体験をまとめる中で、遠藤卓郎は「飛ばす側」の実感の要点をまとめているが、

その中のひとつとして「飛ばされた人が笑い出すことがある。或いは溢れ出すようにニコニコすることがある」を挙げている。こうした報告は、本研究の調査データと符合すると言える。

(遠藤卓郎(2002) 体と気の世界探訪. 勉誠出版, 茨城 pp41-68.)

- 13) 発達心理学をフィールドに原初的コミュニケーションについてのフィールドワークと論考を重ねた鯨岡峻は、原初的コミュニケーションにおける身体の問題の重要性を指摘している。自身のフィールドワークの中での体験に基づいて、彼が述べる(1)感受する身体と(2)表情する身体との関わりは、本研究の調査で映像から観察できることと重なるところがある。(1)感受する身体とは、「他者の身体に起っていることがこの私の身体を共鳴させ、揺さぶり、他者身体に起っているのとほぼ同じことがこの私にも起こり得るのだという間身体性についての考えに予する立場」に立ち、人と人が触れ合ったり、関わり合ったりする場面で、他者の経験を感じて共有する、経験する身体である。これと表裏の関係にあるのが(2)表情する身体で、「身体の内奥で感受するものがあるときに、それはおのずから表面へと浮かび上がって一つの表情をまとうという、身体の表出的側面」を捉えたものである。鯨岡は、すべり台でどしんと落下した「先生」を目にした保育園児が「すごい！」と声を発したり、顔をしかめたりするエピソードを挙げている。「先生」の経験を感じする身体は、このときそれを、「すごい！」と声をあげる・一瞬顔をしかめるなどの身体の表情として表出させる表情する身体となっている。

こうした見解に基づき、自他の交差様相的(cross-modal)な感受機能を仮定するならば、IV. 2. (2)節で述べた身体や身体感覚の協調性と、それを内的な意識やイメージで捉えて表情を変化させていくこととは、どちらも他者との共鳴現象であるということになる。(鯨岡

峻(1997) 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房, 京都.)

- 14) それは正に、ウィトゲンシュタインを解説して柄谷行人が述べている「そのような記号・形式で何かを『意味している』ことが、《他者》にとって成立するか否かが問題」となっている過程である。(柄谷行人(1992) 第三章 命がけの飛躍. 柄谷行人. 探求 I. 講談社, 東京. pp46-69.)

引用文献

- 遠藤卓郎(1992) 気功における身体. 体育の科学 42 巻 4 号:258-263. (特集 身体運動とメディア)
- 津村喬(1993) 気脈のエコロジー: 天人合一と深層体育. 創元社, 大阪.
- バーガー, P. L., ルックマン, T(1977) 日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法. 新曜社, 東京.
- 西野皓三(1993) 「気」の贈りもの: 西野流呼吸法. 求龍堂, 東京. (ウェルネスブック 5)
- 遠藤卓郎(2002) 体と気の世界探訪. 勉誠出版, 茨城 pp41-68. (知の銀河系 10)
- 野村一夫(1992) 社会学感覚. 文化書房博文社, 東京 pp232-237.
- ミード, G. H. (1973)a 精神・自我・社会. 青木書店, 東京. (現代社会学大系 第10巻)
- ミード, G. H. (1973)b 精神・自我・社会. 青木書店, 東京 pp85.
- ヴィトゲンシュタイン, ルドヴィッヒ(1976) 哲学探究. 大修館書店, 東京. (ヴィトゲンシュタイン全集 8)
- フリック, ウヴェ(2002) 質的研究入門: <人間の科学>のための方法論. 春秋社, 東京.
- 佐藤郁哉(2002)a フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社, 東京.
- メリアム, S. B.(2004) 第4節 調査者について. メリアム, S. B. 質的調査法入門: 教育における

- 調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房, 京都. pp28-35.
- ヴァーガス, マジョリー(1987) 非言語コミュニケーション. 新潮社, 東京.
- 大坊郁夫(1998)a しぐさのコミュニケーション: 人は親しみをどう伝えあうか. サイエンス社, 東京.
- 菅原和孝, 野村雅一編(1996) コミュニケーションとしての身体. 大修館書店, 東京. (叢書 身体と文化)
- 佐藤郁哉(2002)b フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社, 東京 pp318-322.
- 大坊郁夫(1998)b しぐさのコミュニケーション: 人は親しみをどう伝えあうか. サイエンス社, 東京 pp.33
- van Hooff, J.A.R.A.M(1972) A Comparative approach to the phylogeny of laughter and smiling. Hinde, Robert A. ed. *Non-verbal Communication*. Cambridge University Press, Cambridge pp209-241.
- 濱野清志(2008) 覚醒する心体: こころの自然、からだの自然. 新曜社, 東京 pp140-141.

付録 1 調査対象者へのインタビューの転記 (一部抜粋)

転記内の記号についての注	
—	言い淀み、もしくは二人の話し手の発言がかぶって話を止めた場合 (短いものは—)
(5.0 秒)	話し手による沈黙 (秒数)
《手を振る》	動作・状況の補足的説明
(*)	録音データの聞き取り不可能な箇所
M: そういう [とくに—] N: [そうなんです。]	[] は話がかぶっている
S	インタビュアー (当事者としては D)

【A: 対氣直後のインタビューから】

(前略)

- 16 S: 「それぞれ」って言われたときに、どんな感じ、でした？
- 17 A: はあ、最初は一
- 18 S: うん
- 19 A: もう全く、はっきり言って全くわからない— (***) 一番最後の— 一番最後は、
- 20 [すごい (**)]
- 21 S: [わたしも見てて] 何かすごい違うっていう感じ—
- 22 A: はあ、何か、自分の中でも、あのう、氣を、し— あのう呼吸しているとき、何か、こっちに

23 落ちてきたというか、何かー
24 S:おさまったという感じは、しているんですか。
25 A:はい。
26 S:気が？
27 A:気がというか
28 S:おなかに？
29 A: (2.0 秒) それが氣なのかどうかは分からないー
30 S:分からないー
31 A:んですけど、あのう、ふうって抜いたときに、
32 S:うん
33 A:何か、そのう、落ちるべきところに〔落ちたみたいなー〕
34 S: [落ちるところに、落ちた] おなかのー 丹田？
35 A:あ、ここらへんに落ちた。
36 S:丹田に？
37 A:ああ、そうですね。あの、そこに近いところくらいにー
38 S:気持ちいい感じ？ それとも何かー
39 A:そうですね、でも何かー
40 S:何かしっかりした感じ？
41 A:いや、うへん、「気持ちいい感じ」ー
42 S: (**) が近いんじゃないよねー
43 A:そうですね、何かー
44 S:逆にふっとなったんだよね。
45 A:そうですね。ええっと、どうなんでしょうー
46 (2.0 秒)
47 S:落ちるべきところに落ちるのがー
48 A:何か、はまったっていうー
49 S:うん。はまって。うん。それは、いいこと悪いこと？
50 A:そんなのは別にない。はまったっていう感じ。
51 S:ああ、そうですか。
52 A:でも、それと、
53 S:うん。
54 A:言われて、それ言われたときには、それをこう、どんどん戻していくと、
55 S: うん。
56 A:だいたい、そういう感じで似たところが、大体そういう風に言われているのかなー
57 S:そういう風に E 先生にー
58 A:っていう感じですかね。

(後略)

【B:対氣直後のインタビューから】

- 01 S:どうでした？ 何かちょっと、いいですか、すみません。《小声で》
02 B:何か最初—
03 S:途中から顔色がピンクになったなって、思ったんだけど。
04 B:あ、そうですか (0.5 秒) あのう— う～ん (2.5 秒) すごい失礼かもしれないんですけども、
05 S:うん
06 B:「ボディワーク」《注:Fが氣功を教える授業》を1年間受講したときには、何だろう？ や
07 っぱりどこかで「えっ？氣は（***）そうなんですか～」とか、F先生が「そう、そう、そう」
08 と言うけれども、感じない— どう「そうそうそう」なのかが（笑）、やっぱり、うん (0.5 秒)
09 理解、なかなかできない。自分のからだに多分起っていることは、F先生はわかっているんだろ
10 うけれども—
11 S:うん
12 B:自分自身が分からない—
13 S:うん、うん、うん— (1.0 秒) 見えないもの、だものね。「君は今こうだ」って言われても
14 「えっ」とかいう—
15 (1.5 秒)
16 B:ただ、あの、何だろう、（*）さんとも話してたんですけど、（*）あるじゃないですか。
17 （*）広げて、こう《両手をゆっくり挙げる動作》—
18 S:天の— あ、地下水を汲み上げてっていう呼吸法？
19 B:そうですそうです
20 S:うん—
21 B:うん、あれは好きです。（*）で今もやるんですけど。それをやったときに— あと、あ、
22 足の裏ひろげて手開いて、
23 S:うん、うん
24 B:こうやって広げて《両手をゆっくり開く動作》、っていうのは
25 S:うん
26 B:スッキリしたりするから何かあのう— (1.0 秒) と思ったり、すごい、こう、開くことができ
27 る— ウ、ウェーってするときがあるんですね手が—《大きく開く動作》だから—
28 S:すごい敏感なのはわかった。
29 B:だから、何かあるのかなあなんて（笑）。
30 S:そうかそうか。
31 (2.0 秒)

(後略)

【C:対氣直後のインタビューから】

(前略)

- 50 C:そういう感じと、あと
51 C:何か途中で、

52 S:うん、うん、うん
53 C:あの、接点なしに、立っただけでやったんですけど、
54 S:う～ん、うん
55 C:最初手がじんじんするだけで、
56 S:うん
57 C:で何かこう、「いい、分かる?」、「分かる?」って言われても分んなかったんですけど、で
58 もまんなかぐらいから、その最後の方は、ああ・・・ 何と言うか・・・ ええ、何て言った
59 らいいのか分からないですけど、何か、何か来て、何か感じる——
60 S:う～ん、何か変わってきましたよね。顔色とかもすごい綺麗なピンク色になって——
61 C:ああ、ほんとですか
62 S:うん
63 C:何か感じているなというのがあって、でも、こう何でって言われてもわからないです、自分で
64 やってみろって言われても、こう一人できるとは思わないですけど——
65 S:(笑)
66 S:F先生と(*)なさって、やっぱりE先生とは違う感じ?
67 C:ええっと
68 S:過去になさって
69 C:ええっと
70 S:これ《=対氣》自体が初めてですか?
71 C:そうですね。初めてです。いつもは、いつもは自分で—— 人との関係というよりも、自分で
72 「からだを感じる」という感じなので。
73 S:「自分で感じる」—
74 (3.0 秒)
75 S:う～ん、そうか、う～ん、う～ん
76 (5.0 秒)
77 C:あのう、わたしハンドボールやってて対応動作じゃないですか。
78 S:うん、うん・・・ あ、そうか
79 C:で— そう。で、相手がやっぱり— 例えばディフェンス・オフENSEの関係で、
80 S:うん
81 C:相手がかわして動こうとするのに対して、それを読んで、
82 S:うん、うん
83 C:こう付いていくっていうのは、まさしくこういう感じなんですよね。
84 S:あッ、そうか～
85 C:そうです
86 S:そのアナロジーで行くんだ～
87 C:はい。だから、あのう、オフENSEも、まあディフェンスを感じながらやっているし
88 S:うん、うん
89 C:自分だけの、こう～、

90 S:うん
91 C:じゃなくて、ま、やりたいことがあるけれども相手のことを感じながら、
92 S:同時に、同時に、感じながら、
93 C:ですね
94 S:あ、そうかそうか、それはすごい。

(後略)

【E: (A) の現場の対気の映像をみながらのインタビューから 2009年3月13日】

(前略)

301 E: (2.0 秒) てゆう感じ。ちょっとみて
302 S:ちょっと、もうあの——
303 E:え
304 S:あの、ちょっといいですか。
305 E:はい
306 S:あの、「感じている」っていう風に仰ったときに、えっとー、わたしはその、あの、
307 Cさんのときにも、わからなかったことがあるのですけれども、Cさんはこれやっぱり、
308 あの、ここにF先生がいて、ここに自分がいて、それでF先生が何をやったとか、感じたり、
309 自分のからだはどうだったとか感じるのではなくて、何か「感じる」—— Cさんの話で言えば、
310 何か「感じる」ときに彼女はハンドボールだから、そのやっぱりディフェンスはオフense、オ
311 フenseはディフェンスだとか、常にからだの動きで「ディフェンスだ」とか「オフenseだ」
312 とか言っている中で、で、あの「自分を感じる」んだけど同時に「相手を感じる」というか、
313 わたし《S、調査対象者としてはD》のときは「相手を感じている」んだけど、だけど《Cさ
314 んは》全部「自分を感じている」みたいで、「常に自分を感じている」って仰るんだけど、
315 それだけでも「相手を感じている」、「だけどやっぱり自分を感じている」って仰っていたみ
316 たいで、その辺がよくわからなかったし、何か今のE先生の「感じている」とか「繋がって
317 る」とかが、その、つながっているというのが、その、コミュニケーションとしては最初にある、
318 即ち感じている誰かがいて、それでその誰かが感じているという話なのか、すごい次元の話なの
319 か——。
320 E:えっとからだが感じているもの、
321 S:んん
322 E:を、えっとそのまま——ていうか、それがF先生とか、F先生の氣なのか、僕の、おう、
323 からだの変化なのか、そういうことは、一切、詮索しないです。
324 S:ただ、何か来たなとか
325 E:はい
326 S:何か繋がったなとか (3.0 秒) ——でそのときの感じているからだは、どういうからだ？
327 E:そのときに、感じているからだは、えっと (4.5 秒) 例えば、例えば、さっきの話で言えば、
328 何か、痒くなったりとか、痛くなったりとか、が、あると思う。
329 S:じゃあ、これ《実際に、Eの手首をSの指で一瞬強く押す》ではなく、

330 E:じゃあ。要するにその、自分の、外で何かあの、あって、えっと、わからないけれど、
331 S: (笑) で、からだって、皮膚の内側とか、肉とか、ではない？
332 E: (5.0 秒) う～ん、そう言われると、何だか良く分からないですね。自分自身ですね。
333 S: (4.0 秒) う～ん
334 E:自分自身がいることは間違いなくて、
335 S:うん、うん、うん
336 E:だから F 先生のからだを直接自分が「F 先生を感じているか」、「感じている」というと
337 言われると、「F 先生を感じている」という風に、頭では考えていない。
338 S:うん、うん
339 E:で、頼りは、
340 S:うん
341 E:頼りは (2.5 秒) ほら、一度、ほら、感じ取れると「痛い」とか言うじゃない。
342 S:ふん
343 E:「ああ、痒い」とか。
344 S:うん
345 E:だから、痛いとか、痒いとか、そういうだから、そういう表現に置き換ええない状態
346 S:うん
347 E: (3.0 秒) をそのまま、頼りにしている。自分の中で、
348 S:うん
349 E: ちょっと、表現の仕方がよく分からないけれど、
350 S:うん、うん、うん
351 E:一辺言葉に置き換えたり、「ああ、痛い」とか、「面白い」とか思ったら、何か、その自分の
352 か、感じ、感じを、頭で、狭めている気がしちゃう。
353 S:う～ん、うん
354 E:それを「痛い」という感覚だったり「痒い」という感覚だったりという風に閉じ込めて閉まっ
355 ていると
356 S:う～ん、
357 E:それを、そういう作業を一切しないで (4.5 秒) いる
358 S:うん
359 E:感じ、僕は。F 先生がどうかは知らない、それは。まあ、そういう風に、F 先生はどちらか
360 って言うと、何か、わからないんだけど、こう「広げたり」「こうしたり」、
361 S:う～ん
362 E:何か操作をしているような気がするんですけど (笑)、
363 S: (笑)
364 E:僕は、あんまり (笑)、そういうことはしない。
365 S:うん、うん、うん
366 E:「こういう風に」とか「ああいう風に」とか、「こうやって、ああやって」とかって、「F 先
367 生の中心を意識で捉えて」とか、いうことはあんまりしないです、

368 S:うん、うん、

369 E:僕は。

(後略)

【F: (A) の現場の対気の映像をみながらのインタビューから 2009年7月9日】

(前略)

84 S:くというよりは、あのう、何かE先生は「このとき、こうで、こうで」というところから、ご
85 自分がどういう対気?、対気のとときに何を感じているか? —— 「F先生は『相手にこうして』
86 とか『氣を送って』とか『こうして』『降ろして』とかいろいろやっている」けど、

87 F:うん

88 S:ご自分はただ、「からだがあつて、

89 F:うん

90 S:感じているだけで、

91 F:うん

92 S:何かが起こる」っておっしゃってて、

93 F:うん、そう

94 S:それが[まあ]ほとんど、[メインなんですけど、]

95 F: [Eさんはね] [はい、はい]

96 S:——もし何か、感じていることとか、対気のとときにされていることがあったら、教えてください。
97

98 F:はい、ええっと(3.0秒)僕は対気は、結構積極的に仕掛けているんですよ。それで、ええっと
99 Eさんがああいう風に反応するときというのは、たいていわたしがEさんに働きかけたんです。

100 S:んん

101 F:それで、それともうひとつは—

102 (3.0秒)《FとS、映像の音を聞いて「Eが声をあげてFに飛ばされる」シーンに目をやる》

103 S:こういうのは、ぴったり合っている?

104 F:うん、ぴったり。(1.0秒)で、もうひとつはあのう、ええっと、やるために自分かこう、自
105 分のからだをゆるめたときに、あ、ゆるんだなという風に働き— Eさんに働きかけているわけ
106 ではなくて、自分のからだの調整をして、自分のからだかそうっとゆるんだなと思ったときに
107 Eさんは反応する。

108 S:うん、うん

109 F:わたしがからだかうまく— 状態がよくなったな、というときに— (3.5秒)

110 S:——何か働きかけたり、氣を送ったりしていなくても

111 F:うん、全然。だから、そういう意識はなくて、自分のからだの調整だけしているときでも、

112 (1.5秒)あの、そうなります。はい。で、逆に、さっき最初に言ったときみたいに、ええっと
113 仕掛けてるときも、すっと感じるんですよ。例えばわたしが彼の中心を捉えに行つて、捉えた
114 と思った瞬間に、あの、笑い出すんです。「ああ、つかまった」と言っているのは、わたしが中
115 心をふっと捉えた時「つかまった」という。(2.3秒)で、相手の中心を捉えてしまうと、

116 S:はい
117 F:もう怖くはないんです。
118 S:怖くない?
119 F:怖くない、というか、もう何されても大丈夫。
120 S:んん (1.5 秒) それまでは、怖いんですか?
121 F:怖いというか、用心している。あの、何か、どういう風に来るかわからないなあっていうのが
122 あって、そのう、まあ一応、そのう、どうなっても良いようにっていう風になってますけれど、
123 中心を捉えちゃえばもう、こっちのペース (笑) っていう感じになる。
124 S:それは、E先生とやっているときだけですか、あとは強い先生とかー
125 F:う〜ん、強い先生は、とろうと思ってもとらしてくれない。
126 S: (笑) (1.0 秒)
(後略)

ようせいフォーラム2009 (日本養生学会第10回大会)のご案内

おひな様とお内裏様が写るガラス窓のむこうに、雪がゆったり舞い降りています。つくばの里では、季節はずれの雪が芝生の上にほんのりと薄く白いペールのように積もっています。

プログラムがようやく固まりましたのでお知らせします。やっと第2報をお届けすることができます。大変遅くなってしまい申し訳ありません。まだ参加の申し込みをなされていない方もお時間を見つけてぜひお出で下さい。

日時 : 2009年3月22~23日

場所 : 筑波大学春日キャンパス 201教室 202教室

大会コンセプト : 「立つ」を考える -東洋的身体技法と科学の対話-

参加費 : 会員 3000円、一般参加者 1000円、筑波大学教職員学生は無料

ようせいフォーラム2009 プログラム

3月22日 午前

10:00~10:30 **理事会**

10:30~10:45 **開会式**

会長挨拶 : 鎌田 章 大会趣旨説明 : 遠藤 卓郎

10:45~11:15 **キーノートスピーチ** :

矢田部英正 : 「立つ」を考える ~ 科学と実践の対話にむけて ~

プロフィール

1967年東京生まれ。武蔵野身体研究所主宰。筑波大学大学院修了 体育学修士。体操選手時代の姿勢訓練が高じて日本の伝統的な身体技法を研究する。国際日本文化研究センター研究員を経て、和装の身体技法を文化女子大学大学院にて研究し博士号を取得(被服環境学)。

身体を軸とした「物づくり研究」は、椅子、食器、服飾、建築と広い守備範囲をもつ。

著書に『たたずまいの美学~日本人の身体技法』中公叢書、『椅子と日本人のからだ』晶文社など多数。

東京女子大学、武蔵大学非常勤講師



カメラマン：正田千里

11:15~12:00 **学術講演** : **科学者の立場から「立つ」を考える**

スポーツ医学の立場から : 渡會公治(東京大学)

重心動揺検査の原理と意義 : 藤永 博(和歌山大学)

体育に資する重心動揺の捉え方 : 木塚朝博(筑波大学)

13:00～13:30 スピリチュアル打楽器コンサート : 長屋和哉

心と身体と魂のための音楽コンサート ～ 生きる力としての音楽 ～

「惑星が、巨大なリズムによって運行しているように、私たちの身体にリズムを呼び覚まそうではないか。あらゆる生命が、自然のうちに交響しているように、私たちの心も交響しようではないか。そして、いま、魂のための音楽を奏でようではないか。あらゆる生命たちと、ともに。美しいものは、すべて私たちの前にある。それは鼓動し、脈動し、響き、交響している。それは音楽であり、ひとつの力であり、私たちの故郷である。私たちはひとつの美であり、交響する生命の多様なうねりなのだ。私たちは音楽の歓びをえ、それを生きる力とするためのコンサートを行ないます。

「歓ばしい生命を生きるために。かけがえのない魂と、心のために。」



13:30～14:00 演武 : 新体道

「遠当て」で著名な新体道の演武です。

創始者の青木宏之先生(本学会顧問)自ら、演武を行っていただきます。



14:00～15:00 達人達の「立つ」を測る

各種身体技法の達人達の「立つ」を科学的に計測します。

重心動揺計、フットビューワー、スパイラルマウスなどを用いて測定します。

太極拳、ヨガ、気功(站椿功)、日本民族舞踊、新体道、ダンス(コンテンポラリー)

15:10～17:30 シンポジウム : 「立つ」の実践と科学 — 実技と科学の対話 —

司会 : 矢田部・天野

○ 達人達のデータを見る

○ 「立つ」を語る (主体・主観の立場から) — 何をどう感じているか —

各種身体技法の実践者の立場から、実践主体の内観・内感を語り、解説します。

太極拳の場合 : 谷 祝子 (神戸女学院大学)

ヨガ : 武者小路澄子 (筑波大学)

気功(站椿功) : 関口 博正 (神奈川大学)

日本民族舞踊 : 近藤 洋子 (舞スタジオ)

新体道 : 青木 宏之 (天心会)

ダンス(コンテンポラリー) : 美馬 佳代子 (フリー)

○ 対話編 — 達人と科学者の対話 —

達人たちと科学者たちが、測定した結果をもとにして、同じ現象について客観的立場、主観的立場から語り合います。また、異流派間のコミュニケーションも図りたいと考えています。これらの対話を通して東洋的身体技法と科学との接点(そしてスパーク)が生まれることを期待しています。

18:00～20:00 懇親会

プリムローズ Tel. 029-856-1185

つくば市春日 3-10-11 メソードつくば I-102

3月23日

9:00～ 9:30 総会

10:00～12:00 一般発表

座長： 加藤 敏弘

- 1) 大学必修科目「ウエルネスと身体」の試案

美馬美千代(上智大学)

- 2) 理工系大学における気功呼吸法の授業報告(その3)

田中幸夫(東京農工大学)

座長： 谷 祝子

- 3) 「体ほぐしの運動」による人間関係の変容についての一考察 ～幼児を対象にして～

三坂涼子(筑波大学大学院)

- 4) "コミュニケーション"としての気功 ～映像資料の質的分析を中心に～

武者小路澄子(筑波大学)

13:00～15:00 一般発表

座長： 藤永 博

- 5) バランス運動が立位制御における感覚統合と予測的姿勢調節に及ぼす影響

板屋 厚(筑波大学大学院)

- 6) 足底圧分布からみた日本人の立位、

真瀬垣啓(帝京平成大学)

座長： 板屋 厚

- 7) 高齢者における太極拳実践が立位姿勢時の平衡機能におよぼす効果について

天野勝弘(関東学園大学)

- 8) 内観法の技術と語法に関する身心論的考察

～運動観察論の立場から見た「存思・内観」「内丹法」の身心関係について～

矢田部英正(武蔵野身体研究所)

15:00 終了

編集後記

今年(2009年)で日本養生学会の第3期が終了します。新年からは第4期がスタートします。編集員長としての仕事も、このジャーナルをもって終了となります。振り返ってみれば、しっかりした仕事をしてきませんでした。言い訳はなしに、ただ残念です。新編集員長になってからは活発な活動を期待しています。

これからは、ジャーナルの活性化を投稿という形でサポートしていきたいと思っています。

日本養生学会の会員の皆様、ありがとうございました(浴沂詠歸)。

養生学研究 第6巻 第1号(通算8号)

編集委員会

天野勝弘(委員長)

池垣功一

池田裕恵

遠藤卓郎

伴 義孝

美馬美千代

横澤喜久子

発行日 平成21年12月20日

編集人 天野 勝弘

発行者 横澤喜久子

発行所 日本養生学会

〒167-8585

東京都杉並区善福寺 2-6-1

東京女子大学・文理学部

健康・運動科学研究室

e-mail : yokozawa@lab.twcu.ac.jp

日本養生学会ホーム・ページ

<http://www.yosei.gr.jp/>

※ 本ジャーナルに掲載されたすべての著作物に関するあらゆる権利は日本養生学会に属します。本ジャーナルに掲載されている図、写真および表の無断使用および転用を禁止します。複写するときは、そのつど事前に日本養生学会の承諾を得てください。

本ジャーナルからの引用するときには、必ず出典を明らかにしてください。